

教皇、若い2人の福者を列聖



9月7日、バチカンのサンピエトロ広場で、聖ビエルジョルジョ・フラッサーティ[㊤]と聖カルロ・アクーティス[㊦]の列聖式ミサを終え、ほほ笑む教皇レオ14世（中央）。広場には8万人以上の人々が集まった[㊧]／CNS)



国際

- フラッサーティとアクーティス列聖
教皇、神の計画に従う人生を勧める 1・2面
- 教皇、「ラウダート・シ村」開所 環境負荷ゼロの実践教育施設 3面
- 教皇、ガザの小教区に電話 イスラエル軍の制圧作戦で 3面
- 教皇の一般謁見講話 神に向かう叫びは希望のしるし 4面
- 世界難民移住移動者の日 教皇メッセージ（要旨ほか） 4面

国内

- 親に「全てを委ねた」沖縄戦 伊田初枝さん（那覇・開南教会） 5面
- 母と宗麟^{そうりん}の信仰に導かれて 神田高士^{かんだたかし}さん（大分^{うすき}・白杵教会） 6面
- 第2バチカン公会議閉幕から60年 私たちにつながる意義
ヨゼフ・アベイヤ司教 インタビュー 7・8面
- 国内記事ダイジェスト 8面

- 主日の福音解説 9・10面
- 短歌・俳句 11面
- きょうをささげる（10月の祈り） 11面
- 訃報・告知板・番組 12面

オンラインで日々ニュースを配信している「カトリックジャパンニュース」のダイジェスト紙、月刊「カトリックジャパンダイジェスト」をお届け致します。（「カトリックジャパンニュース」には下記QRコードからアクセス可）

カトリックジャパンニュース



カトリックジャパンダイジェスト 第6号
発行＝カトリック中央協議会広報部
〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館
電話(03)5632-4435 FAX(03)5632-7030

国際

フラッサーティとアクーティス列聖 教皇、神の計画に従う人生を勧める



9月7日、バチカンのサンピエトロ広場で、聖ピエルジョルジョ・フラッサーティと聖カルロ・アクーティスの列聖式ミサをささげた教皇レオ14世（CNS）

【バチカン9月7日CNS】教皇レオ14世は9月7日、20世紀と21世紀に生きた若い男性信徒の福者2人を列聖し、神の計画に従おうとせずに人生を無駄に過ごすことは最大のリスクだと指摘した。

「聖ピエルジョルジョ・フラッサーティと聖カルロ・アクーティスは私たち皆を、特に若い人たちを招いています。私たちの人生を無駄に過ごさずに、天の高みに向けて、素晴らしい芸術作品に仕上げるのです」と教皇はバチカンのサンピエトロ広場でささげた列聖式ミサの説教で勧めた。

「2人の新聖人たちの聖性の素朴でありながらも優れた方式」には、どの時代の誰でも倣うことができる、と教皇は指摘する。「2人は、その言葉で私たちを励まします。『私ではなく神です』とカルロはよく言っていました。そしてピエルジョルジョはこう言います。『全ての行いの中心に神を置くならば、あなたはついに目標に達するでしょう』」

教皇レオ14世は自身の教皇職で初めての列聖式に臨む前に、早くから広場に集まっていた8万人以上の信者たちにあいさつした。

教皇は全ての人に呼びかける。「私たち皆が、ピエルジョルジョとカルロが体験したのと同じことを心で感じとりましょう。このイエス・キリスト、特に聖体への愛、そしてさらに貧しい人、私たちの兄弟姉妹への愛です」

「あなたがた全員と私たち全員も、聖人となるよう召されているのです」と教皇は付け加えてから、列聖式ミサに臨んだ。

「主に自分の全てを明け渡す」

教皇レオはミサの説教で、当日の福音箇所（ルカ14・25～33）でイエスが呼びかけたことについて強調する。「主が私たちに示してくださる挑戦に、主の霊から来る知性と力を使って、ためらうことなく身を任せることです。それは私たちが私たち自身を明け渡して、私たちに関わってくる事柄や考えを受け入れ、主のみことばに耳を傾けるためです」

それは2人の新聖人が実践したこと、全てのキリストの弟子に求められている、と教皇は指摘する。

多くの人は特に若い時に、人生の「岐路」に直面し、自分の人生で何をしていくべきなのかと考える、と教皇は続ける。

教会の聖人たちは、しばしば「偉大な人物」として捉えられるが、そこで「忘れられているのは、聖人たちにとって全てが始まったのは、まだ若かった時に、神に対して『はい』と答え、主に自分の全てを明け渡して、自分のためには何も残さなかったということです」と教皇は説明する。

病にも死にも妨げられない信仰

教皇レオは全てのカトリック信者に呼びかける。「私たちは今日、聖ピエルジョルジョ・フラッサーティと聖カルロ・アクーティスに目を向けましょう。20世紀初頭の青年と私たちの時代の十代の若者です。二人とも、イエスに夢中になり、主のためなら全てを与える覚悟がありました」

「今日でも、ピエルジョルジョの生き

方は信徒の霊性にとっての光になります」と教皇は新聖人2人の生涯について紹介を始める。

「ピエルジョルジョにとって信仰は私的な信心ではなく、福音の力と（「カトリック・アクション」などの）教会団体に関わることによって動かされていたのです」と教皇は説明する。「彼は惜しみなく社会にも関わり、政治生活にも貢献して、貧しい人への奉仕に熱心に身をささげていました」

「カルロは、家庭の中でイエスに出会いました。それは今日、ここに彼の弟妹である双子のフランチェスカとミケーレと共に来ている両親のアンドレアとアントニアのおかげでした」

そして聖カルロ・アクーティスは、通っていたイエズス会運営の学校でも、そして「何よりも、小教区共同体でささげられた秘跡のうちに」イエスと出会っていた、と教皇は付け加えた。「こうして彼は、子ども時代と少年期を通して、祈りとスポーツと勉強と慈善の業を自然に統合する中で成長していきました」

教皇レオ14世はこう強調する。「ピエルジョルジョとカルロは2人とも、あらゆる人のための素朴な行いを通して、神と兄弟姉妹たちのための愛を育んだのです。それは毎日のミサと祈り、特に聖体礼拝でした」

聖フラッサーティは1901年4月6日、イタリア北部トリノで生まれ、25年7月4日にポリオ（急性灰白髄炎）のため、24歳で死去した。聖アクーティスは1991年5月3日、イタリア人の両親の間にロンドンで生まれ、2006年10月12日にイタリア北部モンツァで白血病のため、15歳で死去した。

教皇は2人の新聖人をこうたたえる。「たとえ病に襲われ、若いいのちが絶たれることになっても、そのことが、神を愛して自分をささげ尽くし、神をたたえて、自分と全ての人のために神に祈る2人を止めることも妨げることもできませんでした」



9月7日、サンピエトロ広場でささげた列聖式ミサで、聖カルロ・アクーティスの母親と家族から奉納の供え物を受け取る教皇レオ14世（CNS）

国際

教皇、「ラウダート・シ村」開所 環境負荷ゼロの実践教育施設

【バチカン9月5日CNS】イタリア式庭園や古代ローマ遺跡、豊かな緑の並木に囲まれて、教皇レオ14世は新しい「環境負荷ゼロ」の複合施設「ラウダート・シ村」の開所を祝った。教皇フランシスコの被造物のケアについての教えを促進する目的で、ローマの南東30キロのカステルガンドルフォにある教皇夏季別荘の庭園に開設された。

バチカン・サンピエトロ広場のベルニーニ設計の柱廊を思わせる新設の温室や新築の2軒の建屋は屋上にソーラーパネルを備え、「ラウダート・シ村」の精神を体现する。このプロジェクトは、インテグラル（総合的）エコロジーと持続可能で循環生成型の経済の促進を目指す。

被造物のケアは、「全人類にとっての真の召命です。被造物そのものの中で実現される行いで、私たち自身も被造物の中の被造物であり、創造者ではないことを決して忘れないことが求められます」と教皇レオ14世は9月5日、温室の中でささげられた祈りの集いの説教で強調した。

祈りの集いには、「村」の従業員と家族やローマ教皇庁の関係者、プロジェクトを支援する協賛企業や機関の代表、招待客が参加した。

「今日、私たちが開所を祝うラウダート・シ村は、教会による行動の一つとして、神のみ業を守る者としての召命を果

たすことを目標としています。困難を伴いますが、美しく魅力的な課題です。ここに、キリスト教的な体験の本来の様相があります」と教皇は説明する。

教会の総合的エコロジーについての教えを具現化する「ラウダート・シ村」は、「教皇フランシスコが遺産として残してくださった希望の種です」と教皇レオ14世は続ける。「今日、私たちがここで目に見ているのは、霊性と自然、歴史と芸術、労働と技術が、調和のうちに共存する並外れた美の総合なのです」

一般向けに教育養成プログラムも提供

「ラウダート・シ村」には、34.4ヘクタールの庭園と20.2ヘクタールの農地が広がり、牛や馬、ロバやニワトリ、その他の小動物が暮らしている。

「ラウダート・シ村」の関係者によると、「村」は誰にでも開放され、全世界からの全世代の学生生徒たちのための教育プログラムやカトリック教会の被造物のケアや人間の尊厳を守る教えにさらに従いた

いと望む実業家たちのための黙想会の主催を予定しているという。

現在は、社会で弱い立場に置かれているか疎外を受けている人たちのために園芸や農業の職業訓練プログラムを実施していて、将来は農園で生産されるチーズやオリーブ油、ワインなどを「ラウダート・シ」ブランドの商品として一般に販売することを計画している。



ローマの南東30キロ、カステルガンドルフォの「ラウダート・シ村」に新設された環境教育センター。9月2日撮影（CNS）



9月5日、カステルガンドルフォの教皇夏季別荘の庭園内を視察し、馬を見る教皇レオ14世（CNS）

教皇、ガザの小教区に電話 イスラエル軍の制圧作戦で

【バチカン9月16日CNS】イスラエル軍がパレスチナ・ガザ北部のガザ市への地上侵攻を始めた数時間後、教皇レオ14世は同市唯一のラテン典礼カトリック教会の主任司祭に電話をかけ、自身の憂慮と祈りと寄り添いを伝えた、と教皇庁広報局が明らかにした。

9月16日、ローマ南東30キロのカステルガンドルフォで1日を過ごしていた教皇レオは、ガザ市の聖家族小教区主任司祭でアルゼンチン出身のガブリエル・ロマネッリ神父（受肉したみことば修道会）と電話で話した。

ロマネッリ神父は教皇に、イスラエル軍部隊や戦車はまだ教会がある地域には到達していないと語った、と同広報局は



9月16日、イスラエル軍による地上侵攻から逃れてガザ中部を南下するパレスチナ人たち（OSV）

伝えている。ただ、小教区からも砲撃の音は聞こえていたという。

イスラエル軍は住民たちにガザ市から退去するよう命じているが、ロマネッリ神父は教皇に、約450人が今も小教区の敷地

内に避難していて、小教区は避難民や近隣の住民たちに食料や飲料水、医薬品を提供して支援を続けていると報告した。

教会の小礼拝堂は機能し続けていて、人々を祈りへと導き、子どもたちの活動も支えているという。病者と高齢者の看護や介護も続けられている。

イスラエル政府のイスラエル・カッツ国防相は9月16日午前6時、X（旧ツイッター）への投稿で、こう述べた。「ガザは燃えている。IDF（イスラエル国防軍）はテロリストのインフラを鉄拳でたたきつぶしている。そしてIDFの兵士たちは勇敢に戦い、人質の解放とハマス撃滅のための条件を整えつつある。私たちは攻撃の手を緩めることはなく、後戻りすることもない。作戦が完遂されるまで」

ロマネッリ神父はXに聖ヨハネ・ボスコ司祭の言葉を投稿した。「マリアへの信頼は、揺るぎない慰めと希望を与えてくれます」

国際

教皇の一般謁見講話 神に向かう叫びは希望のしるし

【バチカン9月10日CNS】過酷な試練の時に神に向かって叫ぶことは、信仰の危機ではなく、自分を全く明け渡し、神への信頼を貫く覚悟の表れだ、と教皇レオ14世は説く。

「人生の旅路の中では、何もかも心の内に納めることで徐々に疲れ果ててしまうことがあります」と教皇は9月10日、バチカンのサンピエトロ広場で開いた一般謁見で、傘を差すか雨具を使っていた数千人の巡礼者や来訪者たちに語った。

「イエスは私たちに、それが誠実に、へりくだって、御父に向けられるなら、叫びを上げることを恐れないうにと教えておられます」と教皇は強調する。

「叫びは愛から生まれるのであれば、決して無駄にはなりません。そして神に届くなら、決して無視されることはありません」と教皇は続ける。「それは不信感に陥らずに、別の世界があり得ることを信じ続けるための道なのです」

叫ぶことは「極限の祈りの形」

教皇レオ14世は一般謁見で、イエスの最後の日々を記す福音箇所に見いだす講話を続けている。今回は十字架上のキリストの神に向けた叫びと死について話した。

教皇は説明する。イエスは十字架上で叫びを上げる前に、およそ声に出せるものの中でも「最も胸が張り裂けるような」問いを発する。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」(マルコ15・34)

「御父との親密な交わりのうちに絶えず生きておられた御子が、今は沈黙と不在と深淵を体験されます。それは信仰の危機などではなく、最後まで与え尽くされる愛の最終段階なのです」と教皇は説く。「イエスの叫びは絶望ではなく、誠実なもので、極限にまで至る真理であり、たとえ全てが沈黙のうちにあっても貫かれる信頼を表しています」

「私たちは叫び声を上げるのは何か見苦しいことで、抑えなければいけないことのように考えがちです」と教皇は続ける。しかし「福音は私たちの叫びに大きな価値を与えます。叫びは嘆願や抗議、望みや自分を明け渡すことになり得ることを教えているのです。さらには、どんな言葉も残されていない時に、極限の祈

りの形とさえなります」。

叫びを上げることは「決して諦められない希望」を表すこともできる、と教皇は指摘する。「叫びを上げるのは、誰か聞いてくれる人がまだいるかもしれないと信じているからです」

本物の叫びは「希望の源となる」

「イエスが叫んだ相手は御父ではなく、ご自身だったのです。沈黙のうちにあっても、イエスは御父がそこにおられることを確信していました」と教皇レオはさらに説明を続ける。「そして、こうすることで、イエスは私たちに、たとえ全てが失われたように思えても、希望の叫びを上げられることを教えておられます」



9月10日、雨の中、バチカンのサンピエトロ広場で開いた一般謁見の前に、広場に集まった人々にあいさつして回る教皇レオ14世(CNS)

世界難民移住移動者の日 教皇メッセージ 「移住者－希望の宣教者」

カトリック教会は毎年9月の最終日曜日を「世界難民移住移動者の日」と定めている。今年は9月28日。

この日のために教皇レオ14世はメッセージを発表し、「戦争と暴力と不正と異常気象によって」、何百万もの人々が故郷を追われている現実を指摘し、移住者と難民は逆境の中でも希望を証しする「特別な存在」だと強調した。またその人々の信仰と忍耐を、砂漠を旅した旧約のイスラエルの民に重ね、その勇気と粘り強さは英雄的な信仰の証しだと述べた。

さらに移住者は受け入れ先の国で信仰

「私たちは泣き叫びながら、この世に生まれてきます。それも生き残るための手段なのです。人は苦しい時に叫びを上げますが、愛する時、人を呼ぶ時、助けを求める時にも叫びます。叫ぶことは自分が誰なのかを伝えることで、沈黙のうちに消え去りたくないこと、まだ言いたいことがあると示すことでもあります」

教皇は呼びかける。「過酷な試練が訪れる時にこそ、希望の叫びを上げるすべを学びましょう。それは誰かを傷つけるためではなく、私たち自身を相手に委ねるため、私たちの心を開くためです」

「私たちの叫びが本物なら、新しい光、そして新しく生まれることへの始まりを告げることもできます」と教皇レオ14世はさらに付け加える。「それが神の子どもたちの信頼と自由と共に示されるなら、私たち人類の苦しみ声はキリストの声と一致して、私たちと周りの人たちにとっての希望の源となります」

共同体を活性化し、諸宗教対話を促す「現代の希望の宣教者」になり得ると指摘。教会は「移住者の宣教」のために協力し、継続的な支援を確保すべきだと訴えた。

また、受け入れる共同体も移住者を家族として迎え入れ、才能を発揮できる社会を築くことで、希望の証しとなるよう呼びかけた。最後に教皇は、「旅路を歩む」全ての人々とその同伴者を「移住者の慰め」である聖母マリアの保護に委ねた。



これを受け、日本カトリック難民移住移動者委員会委員長の松浦悟郎司教(名古屋教区)も難民、移住者となった人々のために「祈り行動することで、共に神への信頼に導く『希望の巡礼者』となっていきたい」と呼びかけた。



国内

親に「全てを委ねた」沖縄戦

伊田初枝さん（那覇・開南教会）

那覇市出身の伊田初枝さん（91／同市・開南教会＝写真）は、アジア太平洋戦争（1931～45年）末期の沖縄戦を10歳の時に経験した。住民を巻き込んだ激しい地上戦で、20万人以上が犠牲となった沖縄戦。伊田さんは家族と共に沖縄本島北部の山中の集落で避難生活を送り、集落の全員で米軍に投降して戦後を迎えた。受洗から70年余りになる伊田さんの信仰のルーツは、親に「全てを委ねて」生き抜いた戦争の体験にあるという。



「10・10空襲」

伊田さんは、これまで親族以外にほとんど語ってこなかったという自身の戦争体験を次のように話し始めた。

「私が小学校1年生の頃にはもう戦争（アジア太平洋戦争）が始まっていて、内地（九州以北の日本の領土）から兵が来ていました。小学4年になると日本軍が校舎に入ってきたので、授業は公民館でするようになりました」

「沖縄で戦争が始まった」と感じたのは、沖縄戦が始まる約5カ月前、44年10月10日の「10・10空襲」の時だったという。焼夷弾によって民間人の居住地域まで攻撃したこの空襲で、200人以上が犠牲になった。那覇市の9割が焼失し、人々は家を焼け出された。

伊田さんは当時、両親、姉とおいと5人暮らし。空襲が始まると、一家は近所の人と付近の自然壕（洞窟）に避難し、幸い全員無事だった。米軍の攻撃を逃れるため、一家が向かったのは伊田さんの両親の故郷、沖縄本島北端の国頭村にある奥地区だった。4日間、夜通し歩いたという。

道中は、飢えをしのぐために畑からサツマイモなどを取った。戦争に協力していた「国防婦人会」という地域の女性団体から炊き出しの塩むすびを一つもらうと、伊田さんはそれを2～3食分に分けて水と一緒に少しずつ食べたという。「そのにぎり飯のおいしさだけは、忘れられません」

親が持たせてくれた救急袋の中には、黒砂糖とかつお節（塊）が入っていた。だが時々手に入るイモのほか、「かつお節をしゃぶって水を飲むだけで空腹が満たされていたのかどうか…よく覚えていません」

当時の記憶があまり残っていない理由について、伊田さんには一つ思い当たることがあると、こう話す。

「その頃私はまだ神様を知りませんでした」

たが、親に全てを委ねて行動していたためか、神様から必要なものは十分に与えられているというような信仰的な感覚があった気がします。避難している間も、不思議と今後への不安はありませんでした」

米軍に投降し、戦後へ

一家がたどり着いた奥地区の集落は、自然豊かな森が広がる「やんばる」の山中にあった。周囲で米軍が監視を続けていたが、集落には内地から来ていた日本兵が、軍服から着物に着替えて「住民に交じって」生活していたという。住民は、米軍から自分たちの身を守りながら日本兵をかくまってもいたのだ。

大工だった伊田さんの父親は、集落から離れた山の中腹に避難小屋を建て、家族5人で暮らした。「姉とおいが山の下の畑へサツマイモを取りに行く間、私は父と留守番でした。洗濯やトイレは、小屋の前を流れる小川で済ませていましたね」

そんな生活が3カ月ほど続いたある日、奥地区の区長ら三役衆が山を下り、投降に向けて米軍と交渉を始めた。そして8月15日の終戦の日を迎える前、ついに集落の全員で山を下り、米軍への投降を果たした。全員が無事だった。

「私たち（民間人）は日焼けしているのに、内地からの日本兵は色白だったので米軍に日本兵だと分かってしまい、その後どうなったのか…怖かった。私は沖縄戦の前から、親や周りの大人が、『日本兵の前で沖縄の方言を使うと警戒される』『本当は日本が戦争で負けると思っている』などと言っていた。私たちはずっと、そういう（日本兵を恐れる）雰囲気の中にいたんですよ」

実際、日本兵は住民が方言で話す内容を理解できず、住民を警戒した。沖縄戦では住民をスパイとして疑い、殺害もしている。

こうして奥地区の人々が山を下り、沖縄本島最北端の辺戸岬に出ると、米軍のテントが設営されていた。

人々は米軍から食料等の配給を受けながら、国頭村中心部の辺士名で焼け残っていた民家や家畜小屋で仮住まいを続けた。

ある日、「戦争は終わったようだ」と米兵に告げられ、伊田さんら住民はトラックに乗せられて那覇へ。米軍の攻撃によって荒れ果てた町で、戦後の生活が始まった。

伊田さんにとっての転機は、高校1年生だった51年、学校の近くにあった開南教会へ友人たちと毎日、放課後に通うようになったことだ。「ただ友達と一緒にいられるのが楽しくて、教会で神父様たちにもかわいがってもらって」幸せだった。

同年11月、友人ら十数人と共に受洗。そのうち5人は修道女になり、後年、自身の母、姉、そして父も洗礼に導かれた。

私は「生かされた」

「私は他の沖縄戦体験者と比べて、悲惨な体験はしていないと思います。でも、今でも戦争のことを考えたら涙が出てくる」と、伊田さんは目に涙を浮かべて語り、こう続けた。

「苦しい記憶は時間をかけて薄れていきますが、神様に『生かされた』という実感は、不思議とはっきりしてくるのですね」

伊田さんは最近、母の33回忌を迎えたが、その母を自宅でみとった際、神様に生かされたという実感が特に強くあったと話す。

母は、伊田さんが少しずつ栄養食を飲ませていた時に息を引き取った。沖縄戦のさなか、伊田さんが「全てを委ねた」母。母との関わりは神様に「委ねる」感覚の土台となるものだったが、その母が、最期は神様に「全てを委ねて」自身の腕の中にあった。

「私と共にいてくれる」母への感謝が「お母さん、ありがとう！」という言葉となってあふれ出た瞬間、伊田さんは、こうして母を腕に抱くために「私は生かされた」との思いを深めたという。

「神様のご計画によって、何もかもが喜びに変えられるのですね。生き残った者には、死者のため、生きている人のため、そして全ての人の平和のために祈る務めがあると感じています。それで私はいつも、月や星を見て祈ります。いろいろな人が、苦しみながら同じ月と星を見上げていると思うからです」

国内

母と宗麟の信仰に導かれて

神田高士さん（大分・臼杵教会）

大分県臼杵市内のカトリックの障害者施設で働く神田高士さん（60／臼杵教会＝写真）は、今年6月に洗礼を受けた。神田さんに影響を与え、洗礼に導いたのは母・稜子さん（93／同教会）の信仰と、地元大分のキリシタン大名・大友宗麟の生き方だ。今年7月の大分地区殉教祭でコーディネーターも務めた神田さんに、受洗までの道のりを聞いた。

信仰との出会いと別れ ― 母の場合

神田さんと母・稜子さんは現在、一緒に臼杵教会に通っているが、それが実現したのはほんの4年前のこと。稜子さんは戦後14歳で洗礼を受けたものの、長い間教会に通うことができない事情があった。

戦後、稜子さんの家庭では、終戦により父親が仕事を失い、母親は病気で入院。当時、旧制女学校生だった稜子さんは、父親との暮らしに行き詰まり、家を出た。向かったのは大分県内のサレジオン・シスターズ(扶助者聖母会)の修道院だった。

神田さんは稜子さんからこんな思い出を聞かされている。稜子さんが幼い頃、大分県別府市内の公園に母親と一緒に散歩に出かけた時のことだ。

「幼稚園の子どもたちを連れて遠足に来ていたシスターたちが、子どもたちを優しくいとおしんでいる姿が（稜子さんの）印象に残っていたようです」

稜子さんは修道女になることを目指し、同会が運営する児童養護施設で働きながら勉強をしていたが、終生誓願を目前にして父親の介護のため、退会を余儀なくされた。退会する際、修道院長は稜子さんの将来を案じ、大学で教員免許を取ることを勧め、励まし続けてくれたのだという。

稜子さんは教員免許取得後、同会が当時運営していた学校で教職を務め、さらに臼杵市の公立中学校でも国語を教えた。後に神田さんの父親となる同僚と出会い、結婚するが、稜子さんは自分がカトリック信者であることを打ち明けられなかった。

しかしある時、父親は稜子さんを知るカトリック信者の同僚から「あなたの奥さんはカトリックの信者なのに教会に来ないから、来るように言ってください」と言われた。

地元にはキリシタン迫害・殉教の歴史がある。神田さんは「実家が熱心な仏教

信徒であった父親は、地元には『カトリック信者は異端』という印象が残されていると感じていたようです」と話す。

父親は稜子さんに「信仰を捨てるように」と告げた。稜子さんは黙って夫に従い、教会から離れた。

信仰との出会い ― 息子の場合

稜子さんの長男として臼杵市に生まれた神田さんは、カトリック幼稚園に通ったことはあるものの、稜子さんからカトリックの信仰について聞かされることはほとんどなかったという。

しかし18歳の時、稜子さんから「実は私は信仰を捨てていないの」と打ち明けられた。洗礼名はベルナデッタ・マリア。神田さんは進学で臼杵をたつ前に、フランスのルルドで無原罪の聖母出現を体験したベルナデッタに関する本を読んで、「カトリック信者は終生、信仰を捨てることはできないことを知りました」と振り返る。

神田さんは大学で考古学を学び、卒業後は臼杵市教育委員会に就職。発掘調査や文化財保存の仕事に携わっていた。仏教関係の調査が多かった神田さんに、転機が訪れたのは2008年のこと。長崎県が、キリシタン遺跡と長崎の教会群を世界文化遺産に登録しようという動きが始まった。その関連調査として、臼杵市の下藤キリシタン墓地の調査が計画された。ここでは1956年に十字架を刻んだ墓碑が発見されており、99年には「INRI」（イエス・キリストの磔刑の十字架上に掲げられた罪状書きの頭文字）と刻まれた石造物の破片も発見されていたからだ。

神田さんが長崎県の担当者の助言を受けながら、下藤キリシタン墓地を発掘調査した結果、2013年までに66基のキリシタン墓が完全な形で姿を現した。これがきっかけとなり、神田さんはキリシタン史とカトリックの教義について学ぼうと決心した。一緒に発掘調査をした女性研究者からキリシタン史の基礎を教えてもらったことで、徐々にカトリックの信仰そのものに関心を持つようになった。

母、教会に帰る ― 息子と共に

稜子さんの信仰を理解できなかった神田さんの父親は、2019年に他界した。その2年後、神田さんが稜子さんに、教会に戻りたいか聞いてみると、稜子さんは

はっきりと「戻りたい」と答え、戻ったら最初に「告解（ゆるしの秘跡）を受けたい」と語った。「おふくろは、（ゆるしの秘跡を受けなければ）『このまま罪を背負って死ぬのだ』と、思い悩んでいたのだと思います」。



二人で臼杵教会を訪ね、稜子さんはゆるしの秘跡を受けた。「（司祭は）『ゆるす』とおっしゃって、（ゆるしの秘跡が終わると、これからは）『息子に（教会に）連れてきてもらいなさい』」と稜子さんに伝えたのだという。

そして稜子さんと教会に行くようになった神田さんも、「（いずれ）洗礼を受けることになるだろう」と感じていた。

地元大分のキリシタン大名、大友宗麟は21歳でイエズス会士フランシスコ・ザビエルに出会い、領地内で教会を保護したが、受洗したのは家督を長男に譲った後の、49歳の時だ。宗麟が受洗まで長い時間を要した理由を、神田さんはこう分析している。

「当時、この地域に暮らす人々は仏教や神道を大事にしていました。宗麟は、領主である自分が受洗すると（中立性を保つことが難しくなり）、この国をまとめることが難しくなると考えた、という本人の言行が記録されています」

公務員にも憲法で定める「信教の自由」は保障されているが、職務においては公平性や中立性を求められる。神田さんは、教育委員会での仕事では、特定の宗教を助長したり援助したりすることがないように心掛け、宗麟に倣って在職中の受洗はしないと決めていた。やがて宗麟が亡くなった年齢である58歳に近づくと、神田さんは「自分も58歳で全てを捨て、受洗しよう」と決心し、58歳で前職を退職した。

洗礼は、熊本県の真命山・諸宗教対話センターのフランコ・ソットコルノ神父（聖ザベリオ宣教会）に授けてもらった。神田さんはその日、稜子さんの「涙を初めて見ました」。

教会から60年余り離れていた稜子さんが、心の中で温め続けた信仰が、神田さんに手渡された。そして、キリスト教を大切にした大友宗麟の生き方に引かれている自分がいる。神田さんは「神様は我々には計り知れないご計画を持っている」と感じ、今、母親と共に祈る日々が「平和と幸福の毎日」と語った。

国内

第2バチカン公会議閉幕から60年
私たちにつながる意義
ヨゼフ・アベイヤ司教 インタビュー



ヨゼフ・アベイヤ司教＝1949年、スペイン生まれ。10代の頃に第2バチカン公会議が開かれ、その後、神学生としてスペインで、宣教師として日本で過ごしたほか、クラレチアン宣教会の総長顧問会のメンバーや総長として世界各国を巡回した。2020年から福岡教区司教。

今年は、第2バチカン公会議（1962～65年）が閉幕して60年目に当たる。カトリック教会の方向性を大きく変えたと言われるこの会議はなぜ開かれ、何を変えたのか、また現在の私たちとどのようにつながるのか。ヨゼフ・アベイヤ司教(福岡教区)に聞いた。

― 第2バチカン公会議は、なぜ開かれたのでしょうか？

当時のカトリック教会が、教会の在り方を考え直さなければならぬ時期に来ていたからです。第1バチカン公会議（1869～70年）から100年近くが過ぎ、その間に二つの世界大戦もありました。第2次世界戦争後「世界人権宣言」を国連が発表し（1948年）、人権に対する新しい認識が生まれました。また、社会では世俗化が進み、宗教から離れてしまう人々は多くなりました。世界が大きく変化した中で、教会もそれまでと同じではいられなくなっていたのです。

神学の研究者は、かなり前からそのことを指摘していましたし、典礼の刷新運動はフランス、ベルギーやオランダなどで既に始まっていました。エキュメニズム（教会一致運動）や他宗教に対する教会の姿勢も変わりつつありました。聖書の研究も進んでいました。

その中で教皇ヨハネ23世は第2バチカン公会議を招集しました。その時でなかったとしても何年か後には開かなければならなかったでしょう。教会は行き詰まっていたのです。

― 第2バチカン公会議によって、何が変わったのでしょうか？

第2バチカン公会議(以下、公会議)で教会は大きく変わりました。その実りは、公会議が発表した四つの憲章の中によく表れています。

①『典礼憲章』

一番、目に見える形で変わったのは典礼でした。それまで司祭は信徒に背中を向けてラテン語でミサをしていましたが、公会議以後は信者の方を向き、ミサはそれぞれの国の言葉で行われるようになりました。信徒の霊性は、信心を中心としたものから典礼を中心としたものになりました。信心も大事ですが、キリストの死と復活の神秘を、教会共同体として、信徒を含め皆が参加して祝うことの大切さがはっきり示されたのです。『典礼憲章』にはこう書かれています。「典礼は教会の活動が目指す頂点であり、同時に教会のあらゆる力が流れ出る源泉である」（『典礼憲章』10）。この位置付けはとても重要だと思います。

②『教会憲章』

「教会とは何か」についての理解は『教会憲章』で示されました。それまで組織的な側面が強調されていましたが、『教会憲章』の中で教会は神の民であり、神の愛のしるしであると宣言されています。また、教会の使命に対する理解にも変化がありました。公会議以後は、教えることより対話することに重点が置かれるようになりました。もちろん私たちは「教え」を伝えますが、それを「対話を通して」行うのです。教会は神の国を証しし、その実現に奉仕する共同体と捉えられるようになりました。中心は「教会」ではなく「神の国」です。信徒であっても修道者であっても、司祭であっても司教であっても、皆が神の国の実現に向かって旅する「神の民」であり、教会はキリストに導かれるこの「神の民」の共同体なのです。教会の位階的な構成がなくなったわけではありませんが、それは教会という「からだ全体の善を目指す種々の役務」（『教会憲章』18）と

表現されました。そして信徒の尊厳や使命にも、しっかりと光が当てられました。

③『神の啓示に関する教義憲章』

これは聖書に関して言及した憲章です。公会議は、全ての信者が聖書の本文そのものに近づくことを勧めました。それ以前は、信者が聖書を読むことはあまり勧められていませんでしたが、この憲章は教会による聖書の解釈を尊重しながらも、全てのカトリック信者に、聖書を読んで「イエス・キリストを知るすばらしさ」（フィリピの信徒への手紙3・8参照）を学ぶように強く奨励しました。これによって、信者の交わりの中心に聖書を取り戻し、信者がみことばに養われていくようになりました。

④『現代世界憲章』

一番最後に発表されたのは『現代世界憲章』です。これは世界の現実に向き合う教会の姿勢を初めて示したものになりました。特に貧しい人々を優先することが記されていました。冒頭には、こう書かれています。「現代の人々の喜びと希望、苦悩と不安、とくに貧しい人々とすべての苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子たちの喜びと希望、苦悩と不安でもある。真に人間的なことがらで、キリストの弟子たちの心に響かないものは何もない」

この憲章は、人々のあらゆる現実を、私たちがキリスト者としてどのように受け止めるのか。見えてくる課題にどう取り組むのかについて、新しい展望を開いたのです。

― 第2バチカン公会議が示したものは、具体的にどのように実行されましたか？

公会議を最初に真剣に受け止めて実行したのは、南米の教会だったと言えるでしょう。

南米はもともと司祭が少なく、1人の司祭が広い地域を担当しています。都会から離れた地域で、一つの小教区に40～50の巡回教会があるのは普通です。今でもそうですよ。そこで10～50人ぐらの信徒たちが集まって「基礎共同体」と呼ばれる共同体をつくり、共に祈り、聖書を読み、分かち合うことを始めました。

南米コロンビアにチョコーという地域があり、アフリカから奴隷として連れて来られた人々の子孫が大勢住んでいました。彼らには土地の所有権がなく、貧しく苦しい生活を強いられていました。長く住んでいる土地でも国や企業の都合で追い出されてしまうことがあったのです。私たちクラレチアン宣教会はそこへ派遣されて、時間をかけて人々と一緒に『出エジプト記』を読みました。『出エジプト記』のテーマは、奴隷として捕らわれていた土地からの解放であり、自由の地へ出て行くことです。信者たちは自分たちの歴史を思い起こしました。モーセを通して働かれた神の姿が、自分たちの歩みの中にも見えてきたわけです。聖書の言



バチカンの聖ペトロ大聖堂で1962年に行われた第2バチカン公会議の開会式(OSV)

葉が彼らの行動を導き、運動が起こりました。それは大きく広がっていき、最終的にはコロンビアの国会が、彼らの土地の所有権を認める法律を可決しました。

アジアでは1970年にアジア司教協議会連盟（FABC）が設立されました。74年には台湾の台北で第1回の会議を開き、アジアの教会の方針を打ち出しています。そこではアジアでの宣教の課題として「三つの対話」を示しました。それは「アジアの伝統的な文化との対話」「アジアの伝統的な宗教との対話」「アジアで暮らす人の大部分を占める貧しい人々との対話」、この三つです。これがFABCの出発点となりました。

日本で公会議の動きを全体で受け止めたのは、(87年の)第1回全国福音宣教推進会議(NICE^{ナイスワン})だったと思います。

日本の司教団は第2バチカン公会議の精神に基づき、70年代の初めに「社会に福音を」と呼びかけたが、あまり浸透しなかった。81年の教皇ヨハネ・パウロ2世訪日を機に、改めて最重要使命を「福音宣教」と認識。84年に「日本の教会の基本方針と優先課題」を発表し、優先課題の一つとして全国福音宣教推進会議の開催を決定した。

幸い私はその時、日本にいましたので、松浦悟郎神父（現・名古屋教区司教）や諏訪榮治郎神父（現・大阪高松教区名誉司教）と他の司祭、修道者、信徒と一緒に、協力を頼まれて参加しました。

NICEでは、信徒、修道者、司祭、司教が一つのテーブルを囲み、心を開いて体験を分かち合いました。そして信仰と生活、教会と社会が遊離することなく、生きた福音を伝えるためにどうしたらいいかを話し合いました。

信徒も自分たちの使命を見直しました。教会の一員としての責任を感じるようになったのです。信徒が力強く動けるように、信徒養成のプログラムもいろいろ生まれました。白柳誠一大司教^{はまおふみ}と濱尾文

^お郎司教（二人とも後に枢機卿）、相馬信夫司教、安田久雄大司教らがいて、当時の宣教研究所の所長だった岡田武夫神父（後に大司教）も中心的な存在でした。各教区の担当者が協力し、信徒たちも協力しました。それは生き生きしたひとときでした。

— 今の日本の教会にとって、第2バチカン公会議は
どんな意味を持つのでしょうか？

今の教会があるのは、公会議のおかげだと思います。前教皇フランシスコが主導した直近のシノドスは、公会議のビジョンを実行するものだと言えるでしょう。もちろん世界は60年間で変わりましたので、新しい表現も思想も必要です。それでも教会は一つの道を歩み続けています。

教会の中には公会議を受け入れない人たちもいますね。公会議を真剣に受け止めたら、しんどい面はあるのです。「これをすればいい」という何かが決まっているわけではない。置かれた場でどのように信仰を生きるか、自分で考えなさいよ、みんなと分かち合って識別しなさいよ、ということですから。

識別は現実と切り離せません。自分の生活、社会の現実を見ることが大切です。「現実の社会で生活しているこの私」が、みことばを読む。そこで「こんな呼びかけを感じた」「こんなふうに力付けられた」と発見をすることです。出発点は現実なのです。現実の中でキリストは私たちに関わってくださいます。そのキリストに出会った時、信仰は自分のものになっていきます。

現在のシノドスのテーマも、「ともに歩む教会のため—交わり、参加、そして宣教」ですね。私は、日本の福音宣教の大事な課題は、霊性を深めることだと思います。つまり一人一人が「信仰を持ってよかった」という心からの確信を持つことです。それがないと福音宣教を考えているつもりが、ただその方法論を考えるだけになってしまいます。福音宣教は、方法論では解決しないのです。

国内

オロリッシュ枢機卿来日 シノドス総書記の体験語る

シノドス（世界代表司教会議／2021～24年）で総書記を務めたジャン＝クロード・オロリッシュ枢機卿（イエズス会）が来日し、大阪と東京で「シノドスは大きな体験でした」と自身の体験を語った。日本のシノドス特別チーム（代表＝菊地功大司教／東京教区）はまず9月4日に大阪高松教区の玉造教会（大阪市）でオロリッシュ枢機卿を講師としてシノドスに関する勉強会を開き、日本の司



教団と各教区のシノドス担当者ら30人余りが参加した。勉強会は同月8日、東京のカトリック中央協議会の職員向けにも行われた＝写真。オロリッシュ枢機卿は現在ルクセンブルク大司教。14年前まで日本の上智大学で長く働いていたことから、参加者

にとっては、シノドスで中心的役割を果たした枢機卿から日本語で直接話を聞く貴重な機会となった。



日本カトリック教育学会全国大会 カトリックの価値伝えるために

日本カトリック教育学会・全国大会が、8月29日から8月31日にかけて聖心女子大学（東京・渋谷区／設立母体・聖心会）で開催され、カトリック教育の在り方や、実際の取り組みなどについての研究発表と意見交換を行った。オンラインを含めカトリック教育の研究者やカトリック学校の教職員ら150人余りが参加した。

立命館大学教授の前田信彦氏＝写真＝は、2024年2月に行った全国調査で、20代で比較すると、キリスト教系中高の卒業生が持つスピリチュアル資本（物質的な富や権力などの資本に特別な意味や価値を吹き込むもの）の量は、そうでない学校の卒業生に比べ

て多かったと報告。前田教授は、教育効果は長期に影響を及ぼすため「カトリック教育は相当長期的な視点で見ないといけないと思います」と話した。

さらにキリスト教系中高の卒業生

は、人生の意味を探究したり、友人と語らったりすることが多く、自己省察能力が高いという特徴も見られたという。



関東大震災朝鮮人・中国人虐殺102年 キリスト者が追悼祈祷会

「NCC（日本キリスト教協議会）東アジアの和解と平和委員会」の呼びかけで8月30日、関東大震災後に虐殺された朝鮮人・中国人犠牲者を追悼するキリスト者祈祷会が、東京・新宿区の日本キリスト教会館で開催された。集いには、日本カトリック正義と平和協議会（以下・正平協／担当司教＝エドガル・ガクタン司教〈仙台教区〉）、日本キリスト教会など計17団体が賛同。オンラインで視聴した人を含めて130人余りが集いに参加した。参加者は、祈り



9月6日、朝鮮人虐殺の現場に近い東京・墨田区、荒川の橋の下手で行われた追悼式（一般社団法人ほうせんか等主催）は、朝鮮半島の芸能「プンムル」で締めくくられた

を通じて虐殺の事実と現在につながる問題を確認した。牧師によるメッセージや賛美歌なども交えて、一人一人の心にある偏見や差別について考え、平和を実現する者となるよう祈りを深めた。集いの最後に声明文を発表。今後各地で催される虐殺犠牲者の追悼式に連帯する意向も示した。



主日の福音解説

10月5日（年間第27主日）
ルカ 17・5－10

まだと思っていた

私は足が遅かった。クラスで2番目に遅かった。それ故にと言
うべきか、運動会の日は朝から憂鬱^{ゆううつ}であった。五島列島、玉之浦
町が最もにぎわう秋の運動会で、町じゅうの人たちの声援を受け
ながら、後方を走るつらさといったらなかつた。走る前から結果
は分かっている。T君が最下位。私が最下位から2番目。ところが、
6年生の運動会で私は最下位になってしまった。2人にとっては
未来永劫不動^{えいごう}の定位置と思われていた順位が、小学校最後の年に
入れ替わったのである。遅いなりに彼よりはまだと思っていたの
のだが、その彼にも負けてしまい、しばらく立ち直れなかつた。
「向こうにも意地がある」。夕食の時、父がぼつりと言った。向
こうの意地だったにせよ、考えてみれば、T君がいることです
っかり安心し、まさか追い抜かれることもあるまいと高をくくっ
ていた私がよくないのである。

まだと思う中身が子ども時代の徒競走に関するものであれば
笑い話で済まされようが、信仰の話だったらどうなるだろう。信
仰については、他人と比較して「存外、悪くないのでは」「ましな
のでは」などと決して考えないようにという戒めが今日の福音の
主眼である。「からし種一粒ほどの信仰があれば、桑の木に向か
って、海に根を下ろせと言っても言うことを聞く」（ルカ17・6参
照）とイエスは言う。これは、「わたしどもの信仰を増してくださ
い」（同17・5）と願った使徒たちに対するイエスの回答なのだ
が、「増してください」と訳されているギリシャ語の動詞プロステ
ーミは、プロス（＝加えて）とティテーミ（＝置く）の合成語で、
直訳すれば「付け加える」となる。つまり、使徒たちは十分では
ないにせよ既に幾らかの信仰を持っていたと考えていた節があり、
そうであればこそ、それに「付け加える」すべを尋ねもしたと思



われる。しかし、イエスは「か
らし種一粒ほどの信仰があれば
…」と語ることで、そうした使
徒たちの信仰に関する自己評価
を、恐らくはあまり好ましい考
えではないという意味でやんわ
りと否定しておられる。

徹底したへりくだりを教えたいというイエスの意向は今日の
福音の後半にも受け継がれてい

る。「命じられたことをみな果たしたら、私どもは取るに足りない
僕^{しもべ}ですと言いなさい」（同17・10参照）。ここで「取るに足り
ない」と訳されているギリシャ語の形容詞アクレイオスは、ア（＝
打消しの接頭辞）とクレイオス（＝有益な）から成る合成語であ
るが、直訳すると「益をもたらさない」となる。務めを果たしても、
自分は何の益ももたらさない人間であると認めることが肝要だと
イエスは教える。信仰者にとっては、それなりにやっているとか、
幾らかまだだという考えが最も危険だとイエスは言いたかったの
ではないか。私たちの主は「死に至るまで、しかも十字架の死に
至るまでへりくだられた」（フィリピ2・8参照）主なのである。

くまがわゆきのり
（熊川幸徳神父／サン・スルピス司祭会）

10月12日（年間第28主日）
ルカ 17・11－19

懇願と感謝

韓国語には、「トイレに入る時と出る時は違う」という表現が
あります。わたしたちが何かを切実に成し遂げようとする時は
それだけを求めて頑張りますが、それを達成した後はその切実
さを忘れるという意味です。

さて、今日の福音は難
しくありませんが、祈り
についてとても重要なこ
とを教えています。普段
わたしたちがささげる祈
りの80%以上は懇願の
祈りです。わたしたちは
皆、完全ではないので、
絶えず何かを求め、得よ
うとするのです。

今日の福音で、10人
の重い皮膚病を患ってい
る人たちが自分たちを清
くしてくださるようイエス様に願っていました。ところが、イ
エス様は彼らを清くする前に、祭司のところに行って体を見せ
なさいと命じられます。

これはなんと簡単な指示かと現代のわたしたちには思われま
すが、実はそうではありませんでした。

当時、病気は神からの罰と見なされていたため、病人は罪び
ととして他の人々と交流ができず、共同体の中で暮らすことも
できなかったのです。

ですから、病気が治ってから祭司のところに行って、罪が許
されたと確認してもらうのが普通の認識でした。

ところが、イエス様は皮膚病を患っている人たちに、病気が
まだ治っていないのに祭司のところに行って体を見せるように
命じられるのです。これは偽証として、むしろ重い罪になるに
もかわらず、10人はイエス様のご指示通りに実行しました。
それほど癒やされたいという願いは切実だったのです。

そして皆清くなりましたが、イエス様に感謝するために戻っ
て来たのは異邦人のサマリア人1人だけでした。この人はイエ
ス様の確実な宣言を頂きます。「あなたの信仰があなたを救っ
た」。

わたしたちは皆、80%の懇願の祈りによって恵みを頂きます
が、20%の感謝の祈りによって救われます。

恵みは全ての人に与えられますが、救いは全ての人に与えら
れるとは限りません。

わたしたちは、自分の求めるものが単に今の幸せや、今の心
の平安だけでいいのかと考えるべきです。

わたしたちを救いに導く「ミサ」が、なぜ「感謝の祭儀」と
呼ばれているのか、その意味を深く悟り、感謝する信仰者とし
て生きていければと思います。

（ダニエル・キム・ドンウク〈金桐旭〉神父／韓国殉教福者聖職修道会）



主日の福音解説

10月19日（年間第29主日）
ルカ 18・1－8
世界宣教の日

いつもお祈りし、勇気を失わないように

神学校入学までの期間が空いた時、わたしは山の上の立派な建物の管理人をさせていただくことになりました。周囲を雑木林に囲まれ、誰もいないし、来ない所でした。独りぼっちで怖い、寂しい（；▽；）。イエス様の言われた勇気は1日目からきれいになくなっていました。

なんとか頑張って続けていましたが、明日も来週も来月も誰も来ないと分かったので管理人の仕事を「辞めよう」と決意しました。

辞職を伝えるに行く前日、なぜかお祈りしました。夕日に染まったきれいな庭で、「天にまします…。めでたし…。願わくは…」。

知っているだけのお祈りを唱えました。

祈り終えた瞬間、後ろに何かの気配を感じ振り返りました。そこには1匹のタヌキが座って、私をじっと見ていました（´Д`）。「とにかく逃げないでくれ…」。

そう願いながら食べ物を渡しました。タヌキは食べ物をくわえてさっと帰っていきました。独りぼっちで追い詰められていたわたしは、「祈りが通じ、神様が天使をタヌキに変えて、送ってくださった」とうれしくなりました（^_^）。次の日わたしは仕事を辞めるのをやめて、食べ物を持ってタヌキを待っていました。夕方になって彼はまたやって来ました。感激してタヌキに「ポン吉」と名付けました（女の子だったのかもしれませんが〈笑〉）。

「ポン吉、よく来たな。明日も来てくれ」と声を掛けました。不思議な感覚です。独りぼっちで怖い、寂しいのは何も変わりません。しかし、「もし神様が見ておられるのなら…。もう少し何とかなるのでは」と思えるようになっていました☆

ポン吉は毎日やって来てくれました。独りぼっちのわたしの唯一の友達です。ポン吉は友達まで連れて来るようになりました。



「ポン吉。友達を連れて来てくれたのか。ありがとう！」。うれしくてたまりません。

それから友達は2人、5人、10人と増え続け、20人以上のタヌキたちが毎晩やって来るようになりました。寂しい夜を力付ける天の大群です。この頃には誰がポン吉か分からなくなっていました（-_-;）

管理の仕事は十分に務めることはできませんでしたが、つらくてもなんとか辞めずに続けることはできました。

モーセの腕を支えたアロンとフルのように、祈りとタヌキとの出会いが勇気となって、孤独に打ちひしがれていた弱いわたしを支えていたのかもしれません。

イエス様は教えてくださっています。「昼も夜も神様に祈り、叫び続けている人々を神様は放っておくようなことはなさいません。わたしたちにすぐに応えてくださいます」

「あなたは独りではない」と。

（寺浜亮司神父／福岡教区）

10月26日（年間第30主日）
ルカ 18・9－14

神の前にへりくだる

祈る姿勢と祈りの内容をテーマにしたイエスのたとえ話が本日のルカ福音書の内容です。「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対してイエスはたとえを話された」と述べられています。

自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々とは誰のことでしょうか。たとえ話の中にファリサイ派の人が出てきますからファリサイ派のことだと考えることができます。

また、イエスの弟子だということどうぬぼれたり、人を見下したりする弟子がいたのかもしれませんが。さらにはわたしたち一人一人のことだとも言えます。

ファリサイ派の人が神殿で祈る様子が語られます。彼は胸を張って自分の正しさを得々と並べ立てます。また、おきてを守れ



ないような者と自分は違うことを神に感謝しています。ファリサイ派の人は自分がいかにおきてを守っているか、また断食だけでなく全収入の十分の一のささげ物もしていると自慢げです。

おきてを守っている自分は救われて当然だという自信をファリサイ派の人の祈りに見て取れます。

彼は自分の努力や頑張りで救われると思いつまんでいます。

次に徴税人の祈りが紹介されます。徴税人の祈りは短く単純です。「神様、^{つみびと}罪人のわたしを^{あわ}憐れんでください」。

自分は罪人であり汚れた者だから神殿に近づけるような身ではなく、また神を仰ぎ見る資格もないとでも言うかのように遠くの方からうつむいたまま、胸を打ちながら祈っています。罪人の自分は神の救いから遠く離れていると自覚していたのではないのでしょうか。

徴税人に残されているのは神の憐れみにすぎることだけでした。

神の前に正しい者とされたのはファリサイ派の人ではなく徴税人だとイエスは断言します。

自分の力に頼る者ではなく、神に頼る者を神は受け入れてくださいます。人は自分の努力や頑張りによってではなく、神の憐れみによって救われるということです。

神の憐れみの前にわたしたちは、ただただへりくだるしかないのです。

「高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」とイエスはたとえ話を結んでいます。そのように語るイエスこそが十字架の死に至るまで徹底的に自分を低くしてへりくだることを生きたお方です。

（立花昌和神父／東京教区 カットは全て高崎紀子）

文化

● 図書紹介 ●

『ローマ教皇 伝統と革新のダイナミズム』

山本芳久 著 （文春新書／税込 1155 円）

今年4月に前教皇フランシスコが逝去し、5月に教皇レオⅠ4世が誕生した際、日本のマスメディアもそれを大きく報じた。カトリック信者で哲学やキリスト教を専門とする大学教授である本書の著者は連日、メディアから取材を受けた。



日本のマスメディアが「教皇」を取り上げる際、ほとんどが「核兵器」や「死刑」などの問題に焦点を当て、宗教色を抜いた形での報道になる。著者は、キリスト教信者が全人口の1％程度のこの国では当然のことと受け入れる一方、「それでは教皇についての的確に理解することはできない」と感じ、日頃ほとんど教皇の言葉に触れる機会のない人々に向けて本書を書いた。

本書はまず、米国で強硬な移民政策を掲げる第2次トランプ政権の副大統領が「キリスト教的な考え方」に基づいてその政策を支持したことに対する、教皇フランシスコの批判と、ロバート・フランシス・プレボスト枢機卿（後の教皇レオⅠ4世）のSNS投稿について解説する。

次に教皇選挙が始まる前、選挙に臨む枢機卿たちが開いた総会に目を向ける。そこでは教会が直面している状況や問題点が分析され、今後の教会を導くべき方向性が多様な角度から提案された。教皇庁の発表資料に基づいて米国のカトリックメディアが挙げた「次期教皇に求められる七つの優先課題」を読みながら、教皇レオⅠ4世が選出された背景を考察する。

さらに本書は教皇フランシスコ、教皇レオⅠ4世、教皇ベネディクトⅠ6世の言葉を読み解いていく。教皇たちはそれぞれ現代世界を直視し、その言葉は聖書と2000年に及ぶカトリック神学の伝統に深く根差している。また過去の神学者や教皇への尊敬とつながりも浮かび上がる。

「回教」や「使徒的書簡」などの教皇文書について著者はこう述べる。「数々の優れた候補者の中から選び抜かれて教皇となり、人類全体の福祉のために『言葉』を語ることを生涯にわたる使命として担い取った人物の生き生きとした個性と息遣いの感じられる、万人に開かれた文書なのである」（本書74頁）



毎月5日まで（必着、はがきに3首以内。1人1枚を厳守。氏名に振り仮名を明記。送り先は、本紙1面に記載。下記QRコードからオンライン投稿も可。



愛し方分からぬままに模索して放蕩息子のたとえに行き着く

横須賀 和泉 舞

【評】子育ての場面でしようか。正解はなく思い悩むことしばしばですが、聖書のたとえ話に気付かされ光が見えることがあります。「行き着く」に模索の時の長さ、深さがうかがえます。

ハゼ蘭のレンズ越しなる細き茎神の図形を夕暮れに知る

長崎 はつとりのりこ

感情も奪はれていく酷暑なり今年のセミの恋歌しづか

青梅 重吉 知美

一斉に後ろ向きなる向日葵の暑中見舞は戦争反対

福岡 三谷 淑美

子の誕生記念の杏実りたり六十余年の時を経てなお

秋田 進藤八重子

途上国援助に尽くしし曾野綾子拍手で見送る御許への旅

東京 千葉 明子

尻取りに「司祭」「イエス様」「マリア様」声の弾みは正に神の子

秋田 畑山真理子

名を呼べば長き尻尾で返事する神の造作無駄無きを知る

横浜 永井 栄司

ますますに食事療法厳しかり脂質に加えカリウムも夫は

静岡 櫻井 眞子

丘陵にただ一軒のカフェあれど行く手を塞ぐ爆風の音

東京 向井美和子

俳句

稲畑廣太郎選

毎月5日まで（必着、はがきに5句以内。氏名に振り仮名を明記。送り先は本紙1面に記載。下記QRコードからオンライン投稿も可。



◎ミサ終へて麦茶にほどけゆく会話

神戸 内田 泰代

【評】ミサ後のだんらんの麦茶が暑さと緊張を解く姿

東京 脇谷 善之

◎亡き母の部屋を覗きに来る守宮

岸和田 嶋津 秋子

【評】守宮を母の友のように愛情深く詠んでいる

甲府 穴水 公一

風鈴やミサの鐘の音重なりて

仙台 木下 明

滝風やベール波打つ野外ミサ

東京 山口 岳人

ミサ捧ぐ大暑の司祭浦上忌

名古屋 成田 友子

夏空に祈りあふれる折り鶴や

神戸 涌羅 由美

星涼し祈りの数の瞬きに

川崎 守田 光代

喜雨の中草も虫等も天仰ぐ

京都 今村 聖子

新緑の森を見守る聖母かな

秋田 畑山真理子

頭数親は入れずに切る西瓜

仙台 三宅 温子

ぬぐふ汗吾妻小富士の小さく見え

各務原 安江 郁子

炎帝は日本列島薙ぎ倒し

福岡 木本 敬子

水音と共に下れり青田道

大牟田 岩永美智子

方舟はすでに遠くへ銀河濃し

神戸 屋代 弘忠

シスターも児らもはしやいでキャンプ張り

忌日への祈りとも聞く秋の声

きょうをささげる（教皇による祈りの世界ネットワーク）10月

【教皇の意向：

さまざまな宗教的伝統間の協力】

さまざまな宗教的伝統を信じる人々が、平和、正義、人類の友愛を擁護し促進するために、互いに協力することができますように。

【日本の教会の意向：

被造物、すべてのいのち、自然環境】

私たちが教皇フランシスコのメッセージを受けとめて、よりよい環境を保護し、すべてのいのちを守るために歩むことができますように。

教皇レオⅠ4世はその就任ミサでイスラム、ヒンドゥー教、仏教をはじめとする諸宗教

の代表者を招き、諸宗教の共存を示しただけでなく、ユダヤ教指導者やムスリム代表者との面会で対話と連帯の必要を示し、「平和と人間的きょうだい愛」を促進するための宗教間対話の重要性を表明しました。世界の諸宗教は人間を超える超越者の存在や究極の真理に基づく普遍的な人間の尊厳と愛に開かれており、現実世界を取り巻く自国主義に基づく紛争、格差を生む偏った経済主義や政治体制に対して、普遍的な正義と平和を示すことができます。諸宗教者が個人のレベルからさまざまな国際組織のレベルに至るまで、相互理解と対話に基づき正義と平和と友愛の促進に協力していけるよう祈りましょう。

＊

私たちの「ともに暮らす家」地球は危機に直面しています。前教皇フランシスコは『ラウダート・シ』『ラウダーテ・デウム』を通して国際社会に喫緊の責任ある行動を呼びかけました。進行する地球温暖化による気候変動の被害を多くの国が被っています。その根本原因は自己の欲望を満たそうとする個人から国家レベルまでの過剰な消費生活・経済活動にあります。「技術万能主義」や「市場の論理」を超えて、全ての存在を愛する神への回心を深め、慎ましい生活を心がけ、自然環境の保護と命への慈しみを進めていきましょう。

訃報

水間淳子（みずま・じゅんこ）
修道女（ショファイユの幼きイエズス修道会）
7月20日、熊本市内の病院で乳がんのため逝去。89歳。1936年東京生まれ。初誓願宣立後、長崎、沖縄、東京の同会設立の幼稚園教諭として奉仕した。79年からは奄美大島（鹿児島）で6年間、和歌山で11年間幼児教育に携わった。退職後は、カテキスタとして卒園児や保護者らに明るく楽しく神様の愛を伝えた。96年から同会仁川本部修道院（兵庫）で介護を担当。古仁屋（こにや／鹿児島）の幼稚園で預かり保育の手伝いや、京都、福岡、和歌山、長崎、熊本で共同体への奉仕もした。和歌山信愛女子短期大学の売店事務で学生と関わる仕事をした後、同会仁川本部修道院で自然や訪れる人との交わりを楽しみながら元気に生活していた。2022年にがんが見つかり治療を続けていたが、リンパ節への転移で修道院での生活が困難になり、今年4月30日に熊本のイエズスの聖心（みこころ）病院みこころホスピスに入院した。最後まで神様に全てを委ね、感謝の言葉を繰り返しながら、58年の修道生活と生涯を御父にささげた。

脇山ミキコ修道女（ショファイユの幼きイエズス修道会）
8月3日、同会仁川本部修道院で心不全のため逝去。95歳。1929年佐賀県生まれ。初誓願宣立後、同会が設立した大阪、久留米（福岡）の信愛学院の教師として子どもたちのために働いた。73年からローマで総顧問として修道会のために奉仕。86年からアフリカのチャドで宣教していたが、日本の管区長に選ばれ帰国し6年間奉仕した。その後再び愛するチャドへ出発し、通算16年間チャドの人々と共に生き、神の愛を伝えた。2013年からはベトナムの共同体に派遣された。異文化を受容し、チャレンジ精神旺盛で、愛と交わりの達人として皆に親しまれた。20年12月、90歳でベトナムから帰国。仁川本部で元気に掃除や縫い物など忠実に奉仕していたが、今年6月頃から体調不良となり7月に心不全で入院、療養していた。退院後は仁川本部で姉妹たちに見守られながら最後の苦しみをよくささげ、8月3日22時45分、静かに御父のみもと



に旅立った。

桃園（ももぞの）淳一郎終身助祭（鹿児島教区）
8月5日、入院先の病院で腎不全のため逝去。97歳。1927年台湾生まれ。中学校卒業後、通信（ていしん）省（後の電気通信省、日本電信電話公社）に入り、九州電気通信局管内の諸施設で無線技術者として働く。グレゴリオ聖歌に興味があったことで教会の門をたたき、49年12月に自らも建設に関わった2代目のザビエル教会（鹿児島）で受洗。受洗後は青年、壮年のリーダー格として活躍し、85年に宣教奉仕者に選任された。2005年2月に終身助祭候補者となり、司教区昇格50周年の記念ミサ（同年9月）の中で、昨年1月に帰天した久保俊弘氏と共に教区初の終身助祭に叙階された。叙階されてからは主に鴨池（かもいけ）教会（鹿児島）で聖歌隊の指導、カテキスタとして手腕を発揮したほか、教区のエキュメニズム担当としても働いた。

ボンタッキョ・チプリアノ神父（カルメル修道会）
8月11日、金沢市内の病院で呼吸器不全のため逝去。90歳。1935年イタリア・ロンバルディア州生まれ。若くして同会に入会し、51年初誓願。59年司祭叙階。60年に来日し、65年間の日本での宣教を全うした。金沢教会（石川）主任、同会総長代理（管区長）、上野毛修道院（東京）院長、神学生養成担当者など、修道会の要職を歴任。多くの信徒、同会修道士、修道女、在世会員たちから信頼され、父親のように慕われてきた。責任感が強く、厳しさと御父のような寛大さが両立した優しい人柄であった。司祭室にはいつもレンブラントの「放蕩（ほうとう）息子の帰還」の絵を飾り、訪れる人々を温かく迎えていた。山や自然が大好きで、毎年夏になると北アルプスや八ヶ岳などに登っていた。今年の4月17日（聖木曜日）に硬膜下血種と脳出血を併発して倒れ、入院していたが、イタリアから来たための見舞いを受けた直後の8月11日、いつくしみ深い神の迎えを受けた。

江頭富士子修道女（ノートルダム教育修道女会）
8月16日、京都市内の病院で尿管がんのため逝去。93歳。1931年佐賀県生まれ。59年同会入会。62年初誓願。同会が設立したノートルダム女



学院中学高等学校、京都ノートルダム女子大学、学校法人ノートルダム女学院（以上京都）、クライスト・ザ・キング・インターナショナル・スクール（沖縄）などでの用務・事務職のほか、教会での聖書クラス、寄宿舍係、また多岐にわたるボランティア活動に携わった。静かに、忍耐強く、依存症などの病気や精神疾患のある人、認知症の人、一人暮らしの高齢者、日雇い労働者等の必要を満たすことに生涯をささげた。



安代（あしろ）トミ枝修道女（殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会）
8月24日、北海道石狩市内の同会修道院で肺がんおよび肺内多発転移

告知板

■全 国
▶ こころといのちの法律相談（無料電話相談）10月27日（月）午後3時～7時。くらし・職場・借金・家庭などのさまざまな悩みを抱える市民のための無料電話相談（未成年者可）。弁護士および精神保健福祉士が相談に応じる。相談電話番号は03-6257-1007（全国からの電話受付／通話料有料）または0120-556-289（東京・千葉・神奈川・埼玉・茨城・栃木・群馬発信限定／フリーダイヤル）。いずれも上記相談日限りの電話番号。電話03-3595-8583 第一東京弁護士会人権法制課

■東 京
▶ 展覧会「神秘を彩るイコノリーナ デルペーロ回顧展」 10月21日（火）～26日（日）午前11時～午後7時（初日午後1時から／最終日午後4時まで）、ギャラリー&クラフト杜（もり）（豊島区）。無料。電話04-2945-0510 聖ペトロ・パウロ労働宣教会

のため逝去。87歳。1938年北海道生まれ。64年同会入会。67年初誓願。75年終生誓願。初誓願宣立後の25年間を、俱知安（くっちゃん）、函館、大麻（おおあさ）、苫小牧などの北海道内の幼稚園で全力を尽くして奉仕した。その後は、旭町（岩手県一関市）、苫小牧と旭川の MARIA 院の台所で働き、10年間は札幌 MARIA 院でも修道院内の仕事をした。2カ月前に思いもよらず、治る見込みのない病気が発見され、つい1カ月前に緩和ケアのために花川 MARIA 院（以上北海道）に移ったばかりだった。喜びをもって一生懸命働き、個人の祈りも、共同の祈りも大切にし、先読みも進んで行っていた。自身の偉大な保護者として、特に聖ヨセフを尊敬した。病床にあっても、平安、落ち着きと穏やかな雰囲気の中でいつも感謝をしていた。

■福 岡
▶ ラウダート・シ 10 周年記念シンポジウム「エコロジカルな霊性一和解を生きる」 10月4日（土）午後1時～3時（シンポジウム）、午後3時15分～4時（記念ミサ）、福岡サン・スルピス旧神学院（福岡市）またはライブ配信（シンポジウムのみ）。パネリスト＝フランコ・ソットコルノラ神父（聖ザベリオ宣教会、真命山・諸宗教対話センター創設者）、岩根のぞみ（福岡教区信徒）、深井隆弘（福岡教区信徒、福岡海星女子学院附属小学校校長）。Zoomでのオンライン参加希望者は下記QRコードからラウダート・シ部門ウェブサイトで要申し込み（会場参加、オンライン視聴のみは申し込み不要）。無料。電話03-5632-4445、laudatosi@cbcj.catholic.jp 日本カトリック司教協議会ラウダート・シ部門



番組

ラジオ心のともしび
（朗読・坪井木の実）
10月の放送日と執筆者 1日（水）中井俊巳・2日（木）三宮麻由子・3日（金）越前喜六・4日（土）コリーナ・ダルトン・6日（月）今井美沙子・7日（火）山本久美子・8日（水）熊本洋（よう）・9日（木）こいずみゆり・10日（金）片柳弘史・11日（土）村田佳代子・13日（月）許書寧（きよ・しゅにん）・14日（火）森田直樹・15日（水）湯川千恵子・16日（木）古橋昌尚・17日（金）萩原久美子・18日（土）山本ふみり・20日（月）竹

内修一（おさむ）・21日（火）岡野絵里子・22日（水）松浦信行・23日（木）服部剛（ごう）・24日（金）古川利雅・25日（土）植村高雄・27日（月）堀妙子・28日（火）崔友本枝（ちえー・ともえ）・29日（水）西田仁（以上テーマ「祈り合う」）・30日（木）末盛千枝子（「あの古い教会で」）・31日（金）松尾太（「授かったもの」）。

ホームページ（下記QRコードでアクセス可）では24時間視聴可能。詳細は電話075-211-9341。

